旅するおじさんの文学　ー1930年代前半のドイツ児童文学を中心にー

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-05-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐藤, 文彦, Sato, Fumihiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058206

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇
第 12 号　2020 年　17～28

旅するおじさんの文学
—1930 年代前半のドイツ児童文学を中心に—

佐 藤　文 彦

はじめに

2019 年 12 月、映画「男はつらいよ」の新作が公開された。シリーズ 50 年目の 50 作目である。主人公は車寅次郎から甥の満男に代わった。満男は第 1 作で寅次郎の妹・さくらのひとり息子として生まれるが、寅さんの旅と失恋がメインストーリーだったシリーズの大半では脇役に甘んじていた。ところが 1989 年公開の第 42 作「男はつらいよ　ぼくの伯父さん」以降、ふたりの関係は急速に密になる。その頃、満男は大学受験に失敗して浪人中。将来に悩む甥っ子に対し、おじの寅が父親とは違う視点からアドバイスを送るというのがシリーズ終盤の大まかな筋書きだった。

旅するおじさん、厳密に言うと母の兄弟が甥の成長に影響を与える、父とは異なる成人男子が青少年の将来を方向づける。こういった文学の型は寅さんと満男に限られるものではない。1930 年代前半のドイツ児童文学でも頻繁に見られる。しかしその際、それ以前のおじさん文学との違いもまた、たしかに存在する。[1] 本稿ではそのことを指摘しつつ、両大戦間期ドイツ児童文学におけるおじさん表象の一端を特徴づけたい。

1　旅の途中の母の兄弟：『魔法使いのムックおじさん』（1934）

トーマス・マンの長女、エーリカ・マン（Erika Mann, 1905-1969）が書いた『魔法使いのムックおじさん』*Zauberonkel Muck*（1934）に登場するおじさんは寅さん同様、母の兄弟である。アムステルダムからローマへの旅の途上、彼は姉妹のもとに立ち寄る。まだ見ぬおじさんにふたりの甥っ子は興味を示すが、姉妹の夫は冷淡である。

> 父さんは今夜、機嫌が悪かった。（中略）
> 「仕事で何かあったの」ママは聞いた。（中略）
> 「妖術の先生はいつ来るんだ」今度は父さんが聞いた。
> ママは悲しそうな顔をして父さんを見つめた。「明日の 11 時 23 分」それだけ言うとママは子どもたちのほうを向いて「明日の 11 時 23 分にムックおじさんが来るの」と言った。

ハンスとエッキ（引用者注：両親の息子）は不思議な気がした。妖術の先生？ママの兄弟の名前はアルベルトなのに…。父さんはなんだか怒ってるみたいだった。[2]

母は子どもたちに自分の兄弟を「ムックおじさん」と呼ぶ。だから甥っ子もおじさんを「ムックおじさん」と呼ぶ。他方、父はその呼び方を認めず、妻の兄弟、つまり義兄弟に対し、面と向かっては「アルベルト」、本人のいないところでは「妖術の先生」Hexenmeister と呼ぶ。

概しておじさんとその姉妹の夫の関係はよくない。そうすることで甥っ子から見て公的規範を体現する父親と、そこから逸脱するおじさんの対立関係が演出される。エッキとハンスの父は郵便局勤務、しかも職場での地位は高く、地方の郵政局長くらいの訳語が適当な人物である。父は家庭で息子に厳しい。

父さんはけっこう厳しかった。（中略）例えば男の子らにいつもちゃんとした文で答えるよう求めた。父さんに「エッキ、学校はどうだった？」と聞かれると、「別に」はだめで、「特別なことはなかったよ、父さん」と答えなければいけなかった。（7）

そんな父と比べ、ムックおじさんはどんな人物なのか。おじさんの職業はサーカスの魔法使いである。巡業の途中、姉妹の住む町で公演することになり、ふたりの甥っ子との初めての対面が実現する。その時、上のエッキは 11 歳でギムナジウムの 2 年生、下のハンスは 5 歳でまだ学校に上がっていない。ふたりはおじさんの到着前から、サーカスの公演を宣伝するポスターに興奮する。

最初の広告塔できらびやかなポスターが目についた。
「世界最大級の魔法使いムック・ヴァン・ハーゲン博士」
「ムックおじさんだ！」子どもたちは叫び、ポスターをよく読もうと走った。
「黒魔術の驚異、神秘中の神秘、ムック博士の魔法で物が消える、ムック博士の魔法で変身する、ムック博士はお見通し、謎を言い当て、切り刻み、宙に浮かせて、嵐を呼ぶ。世界最大級の魔法使いムック・ヴァン・ハーゲン博士！」（14）

はたしてエッキとハンスは両親に連れられておじさんのステージを観に行く。そしておじさんが繰り広げるパフォーマンス、非日常の世界に魅せられる。

これがおじさんなんだ、と子どもたちは思った。髭もじゃの大男に、ものすごく変身している。11 時 23 分に列車から降りてきたおじさん、うちでいっしょに豚肉を食べたおじさんを想像してみたけれど、いまやおじさんは別人だった。（28）

おじさんのステージに熱狂した翌日、下のハンスが行方不明になる。弟を探しに出かけたエッキも帰ってこない。母は泣き崩れ、父は警察に捜索を依頼する一方、いたってのん気なおじさんの言動は両親の神経を逆なでする。

> 「ほら」おじさんがそう言って指さした先には、大きめの箱が 4 つと小さいのがひとつあった。「ハッシ（引用者注：ハンスの愛称）が戻ったらパーティをしよう」
> エッテル氏（引用者注：父）はイライラと首を振った。「ふざけないでくれ、アルベルト。下の子が行方不明で見つかるかどうかわからないんだ。上の子が戻ってくるだけでもうれしいさ。いずれにしても私はパーティなんてやらないがね」（78）

結果的にハッシは劇場の舞台裏で見つかる。前夜に見たイリュージョンに魅了され、翌日の昼間にひとりで劇場を訪れた 5 歳児は、舞台裏の倉庫で眠ってしまっていた。それを見つけるのは父でもおじさんでもなく、兄のエッキとその友人である。ハッシを探すべく劇場に侵入したふたりの少年は、舞台裏で将来の夢を語り合う。

> 興奮したディーター（引用者注：エッキの友人）はあたりを見回して言った。「僕はエンジニアになろうと思う。技術こそ最高の魔法だよ。技術をマスターすると役に立つことだってできるし」
> エッキはといえば、完ぺきにマスターできないものがあってもいいじゃないか、と思った。ここにある大きな機械みたいに、人工の風を作るだけで、何の役に立たないものだって立派じゃないか。「エンジニアもいいよね。だけど僕はアーティストになりたいかな」そんなこと初めて思った。なぜアーティストなのか、どんなアーティストなのか、エッキは自分でもわからなかった。（83）

エッキの真新しい夢に関し指摘しておくべきことは、彼が前夜、ムックおじさんに手を引かれ、初めて舞台に立っていたことである。そして明るい舞台から見た客席は暗い海のよう、食事を運ぶウエイターの白いエプロンは泡立つ波頭のようだと感じる。[3] おじさんに感化され、エッキもまた舞台という魔力に取り憑かれてしまったこと、父とは異なる非日常を生きる可能性について、無意識のうちに検討を始めていたことは明らかである。その結果、科学や技術を信奉する友人に対し、自分はもっとミステリアスなアーティストになりたい、おじさんのような世界に生きたいと思わず口走ってしまったのではないだろうか。

ほどなくしてエッキらはハッシを見つける。その後、劇場に仕事に来たおじさんが助けを呼ぶ 3 人の少年に気づき、舞台衣装のまま車で送り届けて大団円を迎える。もちろん義兄弟とも和解する。

「ムック」父さんが初めてそう呼んだ。「ムック、どうもありがとう。話はあとで聞くけれど、まず君にお礼を言いたい。君とそれから」そう言って父さんはディーターと握手した。「こいつもだな」父さんは炭とモルタルで汚れたエッキの頬をポンとはたいた。

「僕も」とハッシがつぶやいた。

「そうね、悪い子のあなたもね」ママはそう言って何度もハッシにキスをした。

父さんは言った。「ハッシの事情聴取は明日にして、今夜はパーティだ」

「そうだな」おじさんは答えた。「私のお別れ会も兼ねておくれ。これから魔法をかけに出かけるけど、すぐに戻る。そしたら盛大にお祝いしよう」エッテル氏はうなずいた。(96-97)

小説はパーティを待たずに終わるため、甥っ子エッキとムックおじさんの別れの場面は存在しない。前述の通り、満男にとって寅さんの存在が意味を持ち始めるのは浪人中のことだった。他方、11 歳のエッキはまだおじさんと人生を語る段階に達していない。しかし母に甘える幼い弟と比べ、エッキは徐々に両親の知らない道を歩みつつある。その証拠に彼は友人とふたりだけで弟を発見する。父とは別の生き方を模索しつつある少年の前に、旅の途中の母の兄弟が現れた。しかもおじさんは父とは違う自由人。そんなおじさんが甥っ子に与える影響の小さいはずがない。おじさんと甥をめぐるこの基本構造は「男はつらいよ」にも共通する。しかし 1930 年代のドイツ児童文学では、その変種もまた存在する。次節ではこの構造の変容を見てみたい。

2　母の兄弟から他人のおじさんへ:『シュトッフェル、海を飛んで渡る』(1932)

エーリカ・マンが 1930 年代前半に発表したもうひとつの児童文学作品『シュトッフェル、海を飛んで渡る』*Stoffel fliegt übers Meer*（1932）にも、おじと甥が登場する。主人公・シュトッフェルは満男と同じ独りっ子、そして母には兄弟がいる。

母さんの兄弟のゼップおじさんはアメリカでとてもたくさん稼いでいて、何年も前に何度も手紙をくれた。そこにはみんなでアメリカに来て、仕事を手伝ってほしいと書いてあった。(中略) その後またゼップおじさんから手紙が届いた。それを読んだ母さんは少し泣いた。すると父さんはぶつぶつと言った。「ゼップに頼らなくても何とかなるさ。こんな失礼でばかげた手紙、怒る気にもならんよ」[4]

ここでもおじさんと義兄弟の関係のよくないことが読み取れる。ただしシュトッフェルの

おじさんが金持ち、世俗的な成功を収めている点は、寅さんやムックおじさんと大きく異なる。

そんなおじさんをシュトッフェルはひとりで訪問する。貧しい両親を説得し、だけど計画の詳細は告げず、10 歳の少年は夏休みにひとりで道を切り拓こうとする。

「ちょっと旅に行かせてほしいんだ。十日だけ休みをちょうだい。絶対に帰ってくるから。食べ物も少しあればうれしいな。ぜんぜん心配しなくていいからね。僕、本当にすごいことをするからね！」(20)

シュトッフェルの考えた「すごいこと」とは、ツェッペリン飛行船に忍び込み、「海を飛んで」アメリカのおじさんを訪れることだった。その点でこの小説は「旅するおじさん」ではなく「旅する甥っ子」の文学として読むことができよう。考えてみれば満男が成長してからの「男はつらいよ」シリーズも、寅さんと満男がいっしょに旅することが多かった。したがってあの映画も観方によっては「旅する甥っ子」の映画と呼ぶことができるかもしれない。

飛行船に潜入したシュトッフェルは、密航がばれたあとも懸命に働くことでアメリカまで連れて行ってもらう。そして無事にニューヨークでおじさんと出会う。

「ゼップおじさん！」そう呼んでシュトッフェルはおじさんに駆け寄った。「ゼップおじさんだよね…やっと会えたんだ！」おじさんは飛び上がると、膝に載せてあった新聞を放り出した。新聞は鳥のようにおじさんのまわりをはらはらと舞った。「シュトッフェル！クリストファー（引用者注：シュトッフェルの本名クリストフを英語読みしたもの）…このチビが！」おじさんはシュトッフェルを抱きかかえ、本当に小さな子どもにするみたいにキスをした。(106)

その後、ふたりがドイツにいる家族らに、電報と電話で無事を告げて小説は終わる。その際、おじさんとシュトッフェルはいっしょにドイツに帰ると言うが、実際に帰る場面は描かれない。そもそもこの小説におじさんが登場するのは物語の終盤になってからで、おじさんが甥っ子にどういった影響を及ぼす（及ぼした）のか、ここでは一切描かれない。むしろこの小説でシュトッフェルの成長に影響を与えるのは、母の兄弟ではない他人のおじさん、飛行船の船長と考えられる。船長は当初、密航者シュトッフェルに厳しく当たる。しかし少年が勇敢にも飛行船の外に出て故障を直す役目を名乗り出ることで、ふたりのあいだに信頼関係が生まれる。

「お前はたいしたチビだ」誰かがシュトッフェルの肩をつかみ、人々のあいだから引

っぱり出してくれた。シュトッフェルの膝は少し震えていたけれど、それが船長だということはわかった。よかった、これでもう僕は悪い子じゃない。(76-77)

シュトッフェルは船長のことが大好きで尊敬していた。船長の背中を見つめながら考えた。僕もこんなふうになりたい、船長さんみたいに。(91)

旅の終わり、シュトッフェルは船長といっしょに記念撮影をする。そして船長に認められたと実感し、ますます彼を好きになる。

「写真の下に何て書いてもらう？」船長が聞いてきた。「船長とその小さな友人で助手のクリストフ、なんてのはどうだ？」シュトッフェルはうれしさのあまり青白くなった。(91)

シュトッフェルにとって、自らを「小さな子ども」のようにかわいがる実のおじさんに会えたことよりも、飛行船の乗組員として大人同様に仕事を与えてくれた船長と知り合えたことのほうが、この夏一番の思い出ではないだろうか。

1930 年代前半のドイツ児童文学の特徴のひとつとして、母の兄弟ではない他人のおじさんの活躍が挙げられる。もちろん『ムックおじさん』のように肉親のおじと甥の関係を描いた作品もあるが、そうではないおじさんが登場し、少年の成長に影響を及ぼし始めたのが、両大戦間期の児童文学の特徴といえる。いずれのおじさんにも共通するのは旅人であること。まだひとりで自由に旅することのできない少年にとって、旅慣れたおじさんの存在は大きいのである。

3　かつて旅した他人のおじさん：『おもちゃ屋のクリック』(1933)

もう一作、他人のおじさんが活躍する作品としてフリードリヒ・シュナック（Friedrich Schnack, 1888-1977）の『おもちゃ屋のクリック』*Klick aus dem Spielzeugladen*（1933）を取り上げたい。ドレスデンに住む 12 歳の少年クリックの暮らし向きはよくない。母はなく、父とふたりで暮らしているが、父が勤めるおもちゃ屋の経営も芳しくない。そんなクリックはアメリカのおじさん、シュトッフェルが飛行船で訪れたような金持ちのおじさんを夢想する。

以前はアメリカの金持ちのおじさんの話を聞くこともあった。父さんが新聞で読んでくれた。おじさんの財布はパンパンで、大西洋を渡って故郷の貧しい親戚を訪問する。そしておじさんが死ぬと、めまいのするような大金を財産に残してくれる。(中略) だ

けどクリックにそんなドルのおじさんはいなかった。[5]

クリックは作中、肉親ではない、ふたりのおじさんと関わるようになる。ひとりはペットショップの店主、もうひとりはかつてバルト海沿岸でニシン漁に携わっていた元船長である。彼らはいずれも旅の途中にもなければ、遠く離れたアメリカに住んでいるわけでもない。クリックと同じドレスデンの住人である。しかしふたりともかつては旅人として、クリックの知らない世界を生きた経験がある。店主の来歴は以下の通りである。

おじさんは言った。「昔、ハーゲンベック（引用者注：ハンブルクの野生動物商人）に招かれて猛獣狩りに参加したことがあるんだ。何か月もアフリカにいてね、象やダチョウを捕まえたものさ」（121）

店主が商う動物はオウムやサル、ワニなど、じつに多彩である。[6] そのことを通じて彼は少年にエキゾチックな、非日常の世界を提供する。ある日、客にクリックとの関係を問われた店主は次のように答える。

「ドレーゼッケさん、この子はお宅の息子さんかい？」客はクリックを見ながらたずねた。「甥っ子みたいなもんです」独身のおじさんは答えた。（43）

元船長もかつて旅した人物として描写される。ニシン漁の航海中に集めた自慢の貝の標本をクリックに見せながら、元船長はこう述べる。

「これだけ集めるのに二十年はかかったよ。漁師や水夫、船長、火夫、貿易商から買ったり、交換したり、もらったりしたんだ。どの貝にも発見と採取の物語があるもんだ。私はもう忘れてしまったけどね」（140）

このようにふたりの他人のおじさんは、クリックの知らない世界、まだ見ぬ世界を教えてくれる人物として登場する。それに対し実の父親の影は薄い。日々の暮らしに追われ、息子に人生の楽しさよりも厳しさを教える存在として描かれている。

会計係のボーデンヴェーバー（引用者注：クリックの父）の食卓からバターがなくなった。慎ましい食卓はよりいっそう慎ましくなった。「貧しい者は」父は息子に教えた。「倹約したり、支出を減らして現状を改善しなければいけない」（148）

クリックの父親は語り手に「現代という鳥かごのなかの小鳥」とまで称される。[7] シュ

トッフェルの父もまた、貧しい田舎の漁師ゆえ、満足に使える金がなかった。その点で両者は共通している。他方、エッキの父の郵政局長はそこまで金に苦労していなかった。が、下の息子が行方不明になるという突発的な事態に見舞われ、彼もまた日常にあくせくせざるを得なかった。他方、おじさんたちが日常の雑事、子育てを含めた現実的な心配事に縛られることはない。気楽な、あるいは自由な存在として、少年あるいは甥っ子の前に現れる。その際におじさんが肉親であるかどうか、金を持っているかどうかは問題ではない。おじさんの財産は、子どもの知らない世界をどれだけ多く知っているか、子どもにとって非日常の世界をどれだけ多く提示できるかにかかっている。それをおじさんは旅を通じて蓄える。

小説『クリック』は表題主人公の少年が宝くじを当て、父親とともに貧困から脱するところで終わる。この偶然におじさんの介在する余地はない。とはいえ、それまでの過程において、クリックが自らの将来を考え始めた以下の描写は注目に値しよう。

> 将来の職業についてクリックは考えたことがなかった。船長にたずねられて初めて、急に理想の自分の姿が心に浮かんだ。白い麻の服を着た僕は、スマートで日焼けしている。夏の日にエルベ川で見たように、帆の下に立って風に吹かれているんだ。そんな自分になりたいと思った。(85-86)

クリックもエッキ同様、おじさんとの交流を通じて別世界に生きることを夢見始める。そしてシュトッフェル同様、旅に憧れ始めるのである。

4　永遠の大学生またはおじさんの時間感覚：『赤いＵ』(1932)

ここまで「旅するおじさん」について述べてきたが、少年が慕う他人のおじさんの概念をもう少し幅広く捉え直してみたい。ヴィルヘルム・マッティーセン（Wilhelm Matthießen, 1891-1965）の『赤いU』*Das Rote U*（1932）は、デュッセルドルフ在住の5人の少年少女を主人公にした探偵小説である。そのうちのひとり、十代前半（小学校中学年）の少年マーラが父親以上に頼りにする人物が、本節で取り上げる他人のおじさん、ベールマン氏である。

> マーラは父親に頼ろうとは全く思わなかった。そうではなくて、誰か他の人を呼び出さなきゃ！そして、マーラはもう、誰がいいのかわかっていた！
>
> ベールマン氏はマーラの父親の大学時代の友人で、いつも陽気な人だった。心配ごとなんておよそなさそうだった。友達のシュレッサー（引用者注：マーラの父）が博

士になり、さらら新聞の編集長になった時も、彼はまだ学生だった。つまり、何もやっていなかった。やっていることといえば、適当に本を漁ったり、うまく行けば楽しい一日を過ごすくらいだった。とはいえ永遠に学生をやっているわけにもいかないので、ベールマン氏はシュレッサー博士が編集長をやっているこの町にやって来たのだった。[8]

ベールマン氏は旅人ではないものの、家庭や仕事に縛られない自由人である点で、これまでのおじさんたちと共通する。そんな彼を語り手は二度も「永遠の大学生」（der ewige Student）と呼ぶ。[9] この名称は時代錯誤な遍歴学生という身分を連想させる。加えて彼には食客という、これもまた前時代的な性格が与えられている。

ちょうど日曜日だった。ベールマン氏はシュレッサー博士のところへ昼食に招待されていた。楽しい食事会だった。マーラはベールマン氏がまだいてくれるなら、午後からスケートに行かないでおこうと思った。この年老いた学生は本当に話すのがうまいしおもしろい。食後にはマーラの母親がピアノを弾き、ベールマン氏はヴァイオリンを弾いた。（107）

ベールマン氏はかつての学友、マーラの父親と対立しているわけではなく、むしろ彼から仕事（記事の執筆）を斡旋されて生きているので、依存しているとさえ言える。そんなおじさんにマーラは父には頼めない相談をもちかける。そして結果的におじさんと、父には内緒の秘密を共有する関係になる。

「僕の父さんも気づかなかったの？」マーラはしょんぼりとたずねた。
「そうだよ、君の父さんも気づかなかったさ。（中略）君がひと言でも父さんに喋ってみろ、ただじゃ済まないぞ！」（105）

先に論者は、おじさんの財産とは旅を通じて蓄えた非日常の経験の豊かさであると述べた。その際の旅は当然、空間移動を想定していた。しかし「永遠の」大学生ベールマン氏を射程に入れると、おじさんの持つ時間感覚もまた無意味ではないように思われる。おじさんとは、父を含めた大人の時間の流れからは降りてしまっている人物、平たく言えば忙しくない人物であり、だからこそ少年たちと同じ時間を共有し、彼らに寄り添うことができるのではないか。おじさんは日常の社会生活とは異なる、非日常の旅の時間感覚に生きている。それゆえ彼らは子どもと同じ視線に立つことができる余裕もまた持ち合わせているのである。

5　読書する少年たち

ここでおじさんの側の共通項を探る作業を一旦中断し、「旅するおじさん」を求める子どもの側の共通点について考えてみたい。結論から言うと、それは少年たちがよく本を読むということである。『ムックおじさん』において、行方不明の弟を探すエッキと友人のディーターは、ゲーテの物語詩やグリム童話、あるいはドイツ・ロマン派の運命劇について言及する。なかでもとくに注目したいのは、彼らがカール・マイ（Karl May, 1842-1912）という、ドイツの大衆娯楽作家の名を口にする以下の場面である。

> 空腹は耐えられないとディーターは言った。「のどが渇くのはもっと危険だけど」
> その点はエッキは心配していなかった。「カール・マイで読んだんだろ。（中略）11月のドイツで一日くらいのどが渇いても死にはしないよ」（59）

カール・マイは『赤いU』の少年たちにもよく読まれている。[10] そのうちの2箇所を以下に引用する。

> ボッダス（引用者注：主人公の少年のひとり）は恥ずかしかった。いつもはこんなに馬鹿じゃない。人並みに読むことだってできる。新聞はどの面も読めるし、カール・マイの小説も手に入れば読んでいた。（12）

> マーラは部屋の片隅に静かに座り、カール・マイを読んだり、読むふりをした。（107）

カール・マイについて詳述する余裕は本論にはないが、19世紀終わりから20世紀初頭に活躍した、いまでも少年に人気の冒険小説家といえばおおよそのイメージはつかめるだろうか。[11] そう考えると以下に引用するクリックの読書傾向も、カール・マイ抜きには考えられないはずである。

> クリックは本が大好きだった。飛行士や探検家、船乗りの話をよく読んだ。（102）

あいにくシュトッフェルの読書を跡付けることはできなかったが、少年とおじさんの親和性について、その他の少年たちの読書遍歴をもとに以下の仮説を立てることができるだろう。

先に論者は、初めてサーカスの舞台に立ったエッキが客席を暗い海に、ウエイターの白いエプロンを波にたとえた場面を紹介した。この発想はもともと少年の側に海を連想する下地がないとそう簡単には思い浮かばないものと思われる。そもそもドイツ文学が海を描

くことは少ない。しかしカール・マイを愛読する少年（たち）は、海の向こうの物語に親しみ、海の向こうの世界に憧れを持っていたからこそ、こういった比喩を思い付いたのではないか。クリックが夢見るのは「白い麻の服を着て、帆の下に立つ自分」だった。シュトッフェルに至っては実際に「海を飛んで」冒険に出てしまった（だから彼には読書を通して想像力をたくましくする必要などなかったと言えよう）。つまりもともと少年の側に非現実的な空想物語、非日常の異世界を志向する素地があって、そこに旅の経験の豊富なおじさんがまるで小説の中から飛び出してきたかのように現れたため、彼らはすぐにおじさんと打ち解けることができたのではないか。シュトッフェルを除き、ひとりではまだ旅立てず読書する少年たちにとって、おじさんは異次元から来たヒーローのように受け止められたというのが論者の読みである。

おわりに

本稿の冒頭で触れた最新作の「男はつらいよ」では、マドンナと別れた満男はおじ・寅次郎のようにひとりで旅に出ることはなく、ふたり暮らしの娘のもとに還って映画は終わる。1930 年代前半に十代前半だった少年たちが満男と同じ二十歳前後の若者になった時、おじさんといっしょに気ままな旅に出られたかどうか、問うことはできまい。仮に彼らが戦中戦後を生き延びたとして、満男のように家庭を持つのか、それとも寅さんのように旅人になるのか、それもまた問うても詮無いことだろう。しかし父とは違う生き方を模索し始めた年頃の少年たちにとって、旅の途中の魔法使いのおじさんと出会ったり、旅慣れたおじさんといっしょに大西洋を横断したり、かつて海を渡ったおじさんから旅の体験談を聞いたり、旅人の時間感覚を持ち続けるおじさんと秘密を共有した経験は、何ものにも代えがたいはずである。両大戦間期ドイツ児童文学を彩る旅するおじさんたちはみな、かつて熱中した冒険小説の人物のように、大人になった少年にとっても憧れの存在であり続けたことだろう。

＜注＞

[1] 20 世紀初頭のドイツ語圏のおじさん児童文学については、拙論：「おじさん文学論に向けて—ドイツ語圏における研究史と 20 世紀初頭の児童文学を中心に—」、『金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇』第 11 号、2019 年、51-66 頁参照。

[2] Erika Mann: *Zauberonkel Muck.* Zürich: Büchergilde Gutenberg 1955, S. 9-10. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ数のみアラビア数字で記す。

[3] Vgl. Mann: a. a. O., S. 34.

[4] Erika Mann: *Stoffel fliegt übers Meer.* Reinbek bei Hamburg: Rowohlt 2005, S. 18-19. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ数のみアラビア数字で記す。なお、訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。エーリカ・マン『シュトッフェルの飛行船』若松宣子訳、岩波書店、2008 年。

[5] Friedrich Schnack: *Klick aus dem Spielzeugladen. Roman für das große und kleine Volk.* Frankfurt am Main: Insel 1988, S. 10-11. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ数のみアラビア数字で記す。なお、訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。シュナック「おもちゃ屋のクリック」大山定一訳、『世界少年少女文学全集 第 18 巻』、東京創元社、1961 年。

[6] 誕生日にワニを買ってもらう少年（クリックの同級生）のおじはフランクフルトの動物園の園長に設定されており、少年はこのおじへの尊敬の念を隠さない。ここでもおじさんと異世界が結び付く時、おじさんの魅力はいやが上にも増すことが読み取れよう。Vgl. Schnack: a. a. O., S. 97-98.

[7] Vgl. Schnack: a. a. O., S. 59.

[8] Wilhelm Matthießen: *Das Rote U. Eine Detektivgeschichte.* München: dtv 2008, S. 96. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ数のみアラビア数字で記す。なお、訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。ヴィルヘルム＝マッティーセン『赤い U の秘密』中村浩三訳、学習研究社、1982 年。

[9] Vgl. Matthießen: a. a. O., S. 99 u. 146.

[10] 主人公たちが追いかける「赤い U」の正体が判明する場面でも、カール・マイの冒険小説の人物が重要な役割を果たしている。Vgl. Matthießen: a. a. O., S. 169.

[11] Karl May については Annette Deeken: May, Karl. In: *Neue Deutsche Biographie.* Bd. 16. Berlin: Duncker & Humbolt 1990, S. 519-522 を参照。

本研究は JSPS 科研費 18K00446 の助成を受けたものである。